C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2010

Vol.2

中学版

1 私を育てたあの時代、あの出会い

「とにかく列車を走らせろ」
心が奮い立った新設校での思い出
新潟県上越市立春日中学校校長◎佐藤賢治

特集

3 「学力保障」のために、移行期間の今できること 第2回
学力下位層が伸びる授業づくり

4 インタビュー
集団経営の視点での授業づくりが生徒の学力を伸ばす
全日本中学校長会総務部長・東京都中学校長会副会長◎大江 近

6 課題整理
どこが難しい？
学力下位層を伸ばす授業づくり

8 学校事例 1
「おおたけ授業スタイル」をワークショップ型研修で確立
広島県大竹市立大竹中学校

14 学校事例 2
「授業記録」で見取りを共有
個に寄り添う授業を20年間追求
神奈川県横須賀市立池上中学校

20 学校事例 3
外部講師の目や校内研修を生かし、授業力と学習力の向上を目指す
大阪府大阪市立花乃井中学校

26 学校事例 4
60分授業の導入により授業の「学び残し」を解消
秋田県由利本荘市立大内中学校

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

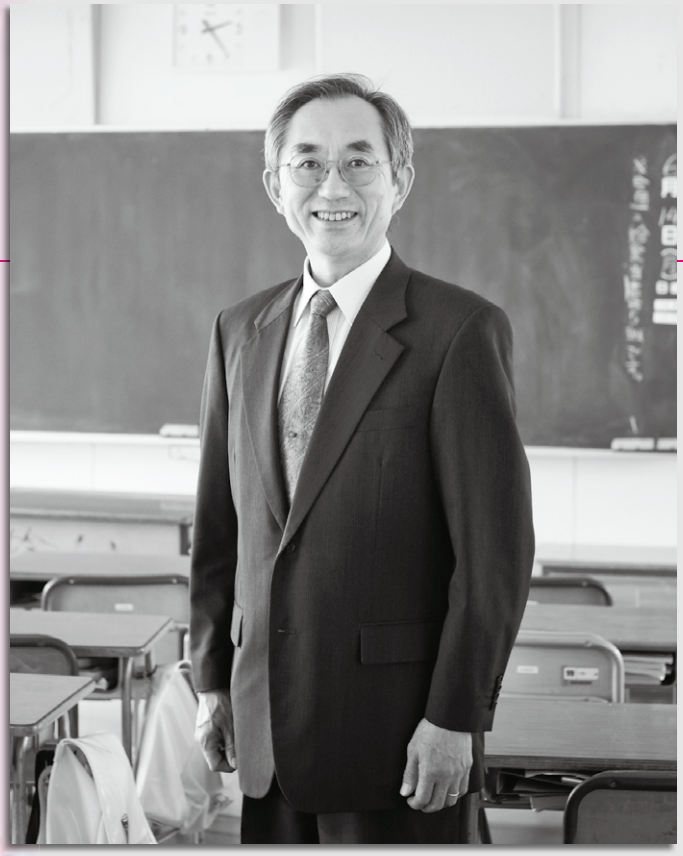
http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

私を育てた
あの時代、あの出会い
Vol.2

「とにかく列車を走らせろ」心が奮い立った新設校での思い出

新潟県 上越市立春日中学校校長 佐藤賢治 SATO KENJI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、佐藤校長が語る。



さとう・けんじ　新潟県内の中学校のほか、1991年から3年間、ルーマニアのブカレスト日本人学校に勤務。現在はキャリア教育の研究を進め、2008年度関東ブロック校長会で新潟県代表として研究成果を発表。専門は理科・数学。

- **大学時代**
  中学生に理科の楽しさを伝えたいと、教師を志す
- **1977（昭和52）**
  新採として松之山町立松之山中学校（現十日町市立松之山中学校）に赴任
- **1983（昭和58）**
  新設校の上越市立春日中学校に赴任。村山和夫校長と出会う

春日中学校の卒業アルバムより佐藤先生が紹介された1コマ

- **1991（平成3）**
  ルーマニアのブカレスト日本人学校に勤務
- **2004（平成16）**
  柏崎市立松浜中学校に校長として赴任。キャリア教育に出合う
- **2010（平成22）**
  上越市立春日中学校に校長として赴任

新設校での重圧に負けず教師を一つにした

1983年、31歳の私は新設校の上越市立春日中学校に着任しました。市中心部に位置することもあり地域の期待は高く、「市内でナンバー1の学校にしよう」と意気込んで入学式を迎えたことを覚えています。

その気持ちは他の教師も同様でした。しかし、それぞれに理想とする教育があり、なかなかビジョンが一つにならない。私を含め、どの教師も新設校というプレッシャーから力んでいたのでしょう。

そうした中で、一人だけ自然体の先生がいました。初代校長の村山和夫先生です。それまでに私が出会った校長はどこか近寄り難い存在でしたが、村山校長は教師や生徒に気さくに話しかけ、誰からも親近感を抱かれる人柄でした。

その村山校長が職員会議で発した一言が今でも忘れられません。

「とにかく列車を走らせろ。レールは後から敷けばいい。問題があれば、自分が責任を取るから」

村山校長は、校長として他の教師とは比較にならないほど大きな重圧を感じていたはずです。しかし、そ

うした素振りは一切見せず、新設校ゆえにゼロからのスタートであることを逆に楽しもうと語りかけ、教師の心を一つにまとめたのでした。

村山校長の言動からは、教師を深く信頼されていることが伝わってきました。家庭訪問で職員室に帰って来るのが23時頃になったとき、驚いたことに村山校長が待っていてくださいました。生徒の状況を話すと、最初に返ってきた言葉は「ありがとう。頑張っているね」。至らぬ点も多かったはずですが、それを指摘するのではなく、まずは認めてくださったことに勇気づけられたのを思い出します。

村山校長は、生徒のことも実によく見ていました。何より感心させられたのが、500人ほどの生徒の名前をすべて覚えていたこと。そして作業着を着て、子どもと一緒に校庭の草むしりをしながら話を聞くのです。校長先生から名前を呼ばれて話しかけられた生徒は誰もが驚き、そして喜んでいました。そんな姿を見て、子どもと同じ目線で話すことの大切さを学びました。

新設後、最初の卒業式で読み上げられた校長式辞（村山校長の直筆）が今も校長室に大切に保管されている

村山校長のリーダーシップのもと、春日中学校は教師や卒業生の誰もが誇りに感じる学校になりました。それを象徴していたのが校歌斉唱です。歌は口だけでなく、心も開かなくては歌えません。当時の春日中学校では、教師と生徒が共に胸を張って大きな声で歌っていました。

すべての子どもは学びに向かう本能を持つ

思いも寄らないことに、2010年度、今度は校長として春日中学校に赴任しました。実は今、春日中学校は生徒指導上の難しさを抱えています。校長として何より心掛けているのは、村山校長のように子どもの心に寄り添うことです。その一心で行っているのが、「Dr.サトケン 算数・数学・理科クリニック」。校長室に数学や理科が苦手な子どもを呼び、個別に教える試みです。

ある日、問題行動の見られる生徒がたまたま校長室の前に座っていたので「クリニック」に誘いました。最初は嫌々という感じでしたが、いざ教えると次々に理解して、「自分にも出来た！」といった驚きと喜びの入り混じった表情を見せました。すべての子どもは、「学びたい」「分かりたい」という本能を持っていると、私は信じています。教師の働き掛けにより、どのような子どもも大きく伸びる可能性を秘めている。校長の立場にあるからこそ、その可能性を信じ、支えていきたいのです。

幸いにもかつての教え子が今は保護者となり、その子どもたちが春日中学校に通っています。学校に愛着を持つ保護者の期待と応援があるのは何よりの強みです。定年まで残された時間は3年間。春日中学校の体育館に再び素晴らしい校歌を響き渡らせることが、教師としての最後の使命と感じています。

「校長として何より心掛けるのは子どもの心に寄り添うこと」

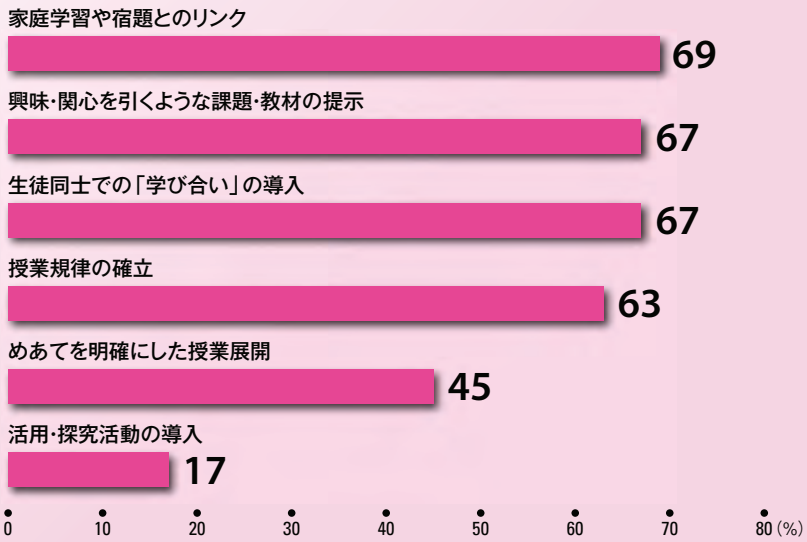
特集

「学力保障」のために、移行期間の今できること 第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

新課程の全面実施に向けて、学力下位層への支援をどのように行っていくかに関心が集まっている。
中でも、学校生活で生徒が最も多くの時間を過ごす「授業」の改善は、重要な課題だ。
インタビューや学校の取り組み事例から、今後の授業改善の方向性について考えたい。

Q 新学習指導要領の実施に向けて学力下位層の生徒を伸ばすためには、どのような授業改善が必要でしょうか？



複数回答可
＊『VIEW21』中学版　読者へのアンケート結果より。アンケートは2010年6月に実施。用紙を郵送しファクスで回収。有効回答数は103

インタビュー

集団経営の視点での授業づくりが生徒の学力を伸ばす

全日本中学校長会総務部長／東京都中学校長会副会長　大江 近（東京都渋谷区立上原中学校校長）

新課程の実施により、学力下位層の生徒がますます学ぶ意欲を失い、上位層との学力格差が拡大することが懸念されている。下位層の生徒が学ぶ喜びを味わえる授業をどう構築していくか。そのポイントについて、全日本中学校長会総務部長である大江近校長にお話を伺った。

授業時数の増加で学力格差が広がる危険が

２０１２年度に全面実施される新課程では、授業時数が増加に転じます。しかし、授業時数が増えたからといって、学力の向上に直結するわけではありません。むしろ、授業時数が増加するからこそ、授業で置き去りにされがちな学力下位層への手立てをこれまで以上に考える必要があるでしょう。

まず取り組むべきは、授業の質そのものの改善です。確かに、放課後の補習時間の確保や課題の出し方を工夫するといった取り組みも大切ですが、「子どもが学校で最も多くの時間を過ごすのは授業である」という基本を再確認したいものです。

その際、ポイントとなるのは、「集団で学ぶ」という中学校の特性を生かしながら、下位層を伸ばす授業をつくり上げることです。下位層の生徒の多くは、自分に自信がない→発言できない→授業が分からない→学習の方法が分からない、という負のスパイラルに陥っています。これを、集団の力を生かして、学習参加に導くのです。

例えば私の勤務校では、5分でもいいから一斉授業に少人数学習を取り入れるという試みをしています。全員で問題を解いた後に、5、6人のグループを作り、生徒が互いに教え合う場面を設けるのです。下位層の生徒は、上位層の生徒から教わることで、問題の解き方が分かります。一方、上位層の生徒は、下位層の生徒に教えることによって、問題についてより本質的な理解が深まります。

一見、単純なことのように聞こえるかもしれませんが、こうした授業を実践するためには、教師一人ひとりが教科に関する「専門的知識」と、実際に授業を運営するための「集団経営力」の両方を備えていなければなりません。特に中学校の場合、重要になるのが集団経営力です。上位層の生徒の知的好奇心を揺さぶりつつ、下位層の生徒にも学ぶ喜びを味わえる授業を実践するには、クラスが一つ

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

になって学びに向かえるように、上位層の生徒が下位層の生徒を馬鹿にしない人間関係を構築することが必要だからです。

こうした人間関係づくりはクラス担任の仕事と捉えがちですが、決してそうではありません。学級集団は、学級活動と共に日頃の教科の授業を通じても形成されます。教科担任が日頃の授業で、小グループによる話し合いの場を設けているかどうか、下位層の生徒の発言の機会を保障しているかどうかが鍵を握ると思います。学級の集団経営における縦軸がクラス担任なら、横軸は教科担任なのです。

おおえ・ちかし◎教職歴35年。担当教科は社会科、道徳。東京都内の公立中学校教諭、東京都教育庁指導部主任指導主事、人事部管理主事、義務教育心身障害教育指導課長を経て現職。2010年4月、全日本中学校長会総務部長・東京都中学校長会副会長に就任。モットーは、「責任の遂行、迷ったら苦しいほうを選べ」

研修の充実で校内の集団経営力を高める

教師に必要とされる「専門的知識」と「集団経営力」のうち、教科に関する「専門的知識」は、個々の教師が自分で身に付けることも出来るでしょう。一方、「集団経営力」は教師同士で互いに高め合うことが不可欠です。

そこで校長に求められるのは、校内研修の充実です。研修というと、「講師を招いて話を聞く」というイメージがあるかもしれませんが、一番大切なのは、今、目の前にいる生徒を巡って、教師が率直に議論できる場を設けることです。

例えば、「授業に集中できていない生徒が多い」という課題があったとします。研修では、「なぜ集中できていないのか」という仮説を立て、「どうすれば集中できるようになるか」という方策を議論します。そして方策が定まったら実践し、その結果を持ち寄って、またみんなで話し合います。こうした校内研修を繰り返すことで、教員の「集団経営力」が高まっていくのです。

こうした研修を、本校では月1回実施しています。校長の役割は、議論を実質的なものにするために、適切な研修課題を設定することです。そのためには日頃から授業見学をするなどして、現場で今、課題になっていることについて敏感でなくてはいけません。

また、課題解決の糸口が見えない時には、より高い視点から教師にヒントを示すのも校長の大事な役割です。私は週1回、「かたらい」というA4版1枚のプリントを教師に配り、今の時代に求められる学力や本校の教科指導の課題について分かりやすく説明したりしています。

校長が軸となり、教師の連携がうまくいけば、教師がスクラムを組んで生徒の学力を伸ばす態勢が出来るはずです。新課程の全面実施を目前にして、学校全体としての力を高めることが求められています。

どこが難しい？学力下位層を伸ばす授業づくり

冒頭のインタビューで大江校長が指摘するように、学力下位層の生徒が分かる授業をいかに実現するかは、新学習指導要領が掲げる「確かな学力」を定着させる上での鍵となる。全面実現に向けた課題と解決のための手立てを、編集部に寄せられた先生方のご意見、事例校の取り組みから考えたい。

課題

生徒の状況

学習意欲が低い

◎授業でつまずいているというよりは、意欲でつまずいている生徒が多いと感じる。新課程により学習内容が増えれば、格差はますます広がると思う

◎無気力型の学力不振生徒が多くなっているような気がする。単に与える量を増やすだけでは、内容が能力を超えてしまうのではないかと心配だ

◎自己肯定感のある子どもは学ぶ意欲も高いが、学力下位層の生徒の多くはそれ以前に自己肯定感の部分でつまずいている

授業内容を消化できない

◎現状の学習内容でも消化しきれない生徒が多い。「やりきれなかった練習問題は宿題」というわけにもいかない

◎小学校時代からの積み残しがあるため、どうしても一斉指導の授業の中ではついてこられない

教師の状況

教師ごとに指導方針が違う

◎授業中に生徒が寝ていても注意したり・しなかったりと、教師によって指導にばらつきがある

◎授業で分からないところがあっても、なかなか言い出せない生徒が多い。教師によってはつまずきに気づかないまま授業を進めてしまうことがある

◎学校として統一した授業方針がない。下位層への対応は、放課後補習や個別指導など、授業外の時間で主に行っている

授業研究の時間が取れない

◎移行措置が始まって、既に授業時数増を見越した教育課程を組んでいる。職員会議や校内研修の時間の確保がますます難しくなっている

◎講師を招いて話を聞く機会はあるが、互いの授業を見合うような実効性の高い取り組みが出来ていない

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

解決の手立て

個を見取る指導の徹底

「授業記録」「座席表」を活用した個の見取り
横須賀市立池上中学校▶P.14

大学教授による個を見取る指導力の強化
大阪市立花乃井中学校▶P.20

授業スタイルの明文化

「おおたけ授業スタイル」「5つの共通実践」
大竹市立大竹中学校▶P.8

「授業評価項目」を意識した授業づくり
大阪市立花乃井中学校▶P.20

60分授業を前提とした授業モデルの設計
由利本荘市立大内中学校▶P.26

教え合い、学び合う場面の導入

中心発問をグループ・ペアで考えさせる
大竹市立大竹中学校▶P.8

必ずグループで考える場面を授業に導入
横須賀市立池上中学校▶P.14

比較・練り合いで生徒の思考を高める3段階のステップ
由利本荘市立大内中学校▶P.26

授業研究の活性化

ワークショップ型の校内研修を設定
大竹市立大竹中学校▶P.8

行事の精選、会議の効率化で月2回ペースの授業研究
横須賀市立池上中学校▶P.14

普段から互いの授業を見合う学校文化の醸成
大阪市立花乃井中学校▶P.20

学校事例 1

「おおたけ授業スタイル」をワークショップ型研修で確立

広島県 大竹市立大竹中学校

荒れから脱却して生徒を学習に向かわせるために大切なのは、授業を立て直すこと。大竹市立大竹中学校では、学校全体で授業改革に取り組み、生徒同士・生徒と教師間の信頼関係を構築。次第に授業規律が確立し、学力下位層の生徒にも、学習に向かう積極的な姿勢が育まれていった。

課　題

- 長く荒れた時期が続き、授業では私語・居眠り・立ち歩きなどが目立っていた
- 教師も生徒指導に追われ、学力向上にまで手が回らない状況だった

実　践

1 授業態度を改めるため「5つの共通実践」を策定

- 教師が授業に際して守るべき規律を共通言語化
- それらの規律がきちんと守れているかどうか、「レベル表」や「ポートフォリオ」で教師が自己評価

2 「5つの共通実践」を踏まえた授業構成「おおたけ授業スタイル」を作成

- 本時のねらいを提示する
- ねらいに迫る場面で、少人数グループを活用する
- 本時のねらいについての評価を行う
- 次時につながる課題を提示する

3 ワークショップ型研修を実施

- 研究授業の本番前に、教師が生徒役になる模擬授業を実施
- 事後研修会はポイントを絞って実施

成　果

- 共通理解に基づく教師の指導力向上
- 聞く姿勢など学習規律が定着
- 生徒の学習意欲が向上
- 問題行動が激減

School Data

◎1947（昭和22）年開校、62（同37）年に現在地へ移転した。不登校対策や小学校との連携に力を入れている。2008～10年度、文部科学省の学力向上実践研究推進校に指定される。

校長◎大石 泰先生

生徒数◎314人　学級数◎11学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒739-0614　広島県大竹市白石1-8-1

TEL◎ 0827-52-5177

URL◎ http://www.yuugao.jp/ohtakejhs/

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

一番に大切にすべきは「授業」

大石泰校長が大竹中学校に赴任したのは2007年4月のこと。当時の同校は、「荒れ」から立ち直る途中にあった。校内暴力こそなかったものの、授業中の私語や立ち歩きが目立ち、授業が成立しているとは言い難い状況だった。生徒指導に追われる多くの教師は、「授業までは手が回らない」という意識だったという。

しかし、そうした状況だからこそ、大石校長はあえて「授業を大切にする学校を目指そう」と呼びかけた。

「生徒が学校生活を送る中で、最も長く過ごす時間は授業です。対症療法的な生徒指導に頼るのではなく、一見、遠回りに見えても『授業を変えることで生徒たちを変えていこう』と呼びかけました」

これを受け、教務部や研究部を中心に議論を重ねた結果、目指す授業像を「生徒が分かった、楽しいと思える授業」とした。

「生徒が学びに向かわない背景には、授業が『分かった』『楽しい』と思えるような経験が少ないことがあります。そうした経験を積み、自分に自信を持つことができれば、一人ひとりの学力が少しでも向上するはずだと考えました」（大石校長）

そこでまず取り組んだのが、授業規律の立て直しを重視した「5つの共通実践」（P.10図1）の設定だ。これは、生徒の行動についての規定ではなく、「教師が何をすべきか」「どこを変えるべきか」を示したものだ。研究主任の岡寺裕史先生は次のように説明する。

「生徒が『勉強が出来ない、分からない』というのは、『生徒に原因があるのではなく、私たち教師の問題である』という考えに立ちました。では、私たちがどうすれば生徒が授業に向かうのか。教師の態度を改めようとしたのが、『5つの共通実践』です。それまで叱ってさせていたことを褒めて伸ばそうとすると、生徒はとても前向きに取り組むことが分かりました。手応えを感じる中で、教師の意識もどんどん変わっていきました」

更に1年後、「5つの共通実践」が定着した頃を見計らって、教師の自己評価のための「レベル表」を作成した。「5つの共通実践」をそれぞれ5段階に細分化し、学習規律だけでなく、指導方法や指導内容まで踏み込み、自分の授業がどのレベルにあるのかを確認できるようにした（P.10図1）。

「教師一人ひとりがより高いレベルを目指すための視点や方策を意識し、授業に臨むことが出来るように工夫しました」（大石校長）

全教科の授業構成を「おおたけ授業スタイル」に

09年度には、「5つの共通実践」を踏まえつつ、授業構成に踏み込んだ「おおたけ授業スタイル」（P.10図2）を作成し、「ねらいの明示」「少人数グループの活用」「指導的評価」「次時につながる課題提示」の4点を必ず押さえた授業を全教科で展開することにした。

「まず、生徒に授業のねらいを伝え、それに迫るために中心となる発問をしっかりつくろう。中心発問には小集団で取り組ませ、しっかり生徒を見て評価しよう。そして、まとめをして、次時の学習や家庭学習につなげていこう。こうした授業展開を全教科に適用させるのが、『おおたけ授業スタイル』なのです」（大石校長）

「あれもこれも取り組もうとすると、教師の負担が大きくなり、続けるのは難しくなります。そこで、分かりやすく簡潔にまとめようと、この4点に絞りました。皆が覚えやすいように、そして『みんなで取り組んでいこう』という思いを込め、教務部と研究部で考

大竹市立大竹中学校校長
大石 泰 Oishi Yutaka
「向上心を持つことを大切にし、『更に伸びる』という気持ちで研究を続けていきたい」

大竹市立大竹中学校
岡寺裕史 Okadera Hiroshi
研究主任、2学年担当、数学科担当。「裏方に徹して前に出過ぎず、後方支援をしっかりしていきたい」

図1　「5つの教育実践」とレベル表

5つの共通実践		レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
1	教師はチャイムが鳴る前に教室に行きます。	◎チャイムが鳴ったときには、教室にいる ◎授業の終わりに、次時の授業準備をするよう指示している	◎チャイムが鳴る前に教室へ行き、授業道具の準備や着席を促している	◎黒板に本時の授業のねらい等を書いて、それらをノートに写してチャイムを待つように指導している	◎授業の初めに小テストや宿題チェックなどを行っている ◎授業の始まりのスタイルをつくっている	◎チャイムが鳴る前に教科係が、全体に対して、学習の指示ができるように指導している
2	授業の始まりと終わりにお互いが気持ちのよいあいさつをします。	◎教師自身が生徒に対して気持ちのよいあいさつをしようとしている	◎服装が整っていなかったり、頭を下げない生徒がいたりしたとき、声を発しようとしている（個人への注意、全員への呼びかけ、指導的評価）	◎「気をつけ」の姿勢ができていない生徒がいる時に、声を発しようとしている（個人への注意、全員への呼びかけ、指導的評価）	◎あいさつの意義について折に触れて指導し、声の大きさや全員が声を出していることなどについて即座に評価する姿勢をもっている	◎「お願いします」の前に、本時の授業内容にふれる発言をするなど、授業に臨む姿勢を喚起する ◎「ありがとうございました」の前に、授業評価を行い、感謝の気持ちを喚起する
3	生徒が発言できる場を多くもち、挙手する機会を多く与える授業づくりをします。	◎一問一答ではあるが、発言する機会を作っている ◎発言する生徒とのやりとりで授業を進めている	◎挙手・起立など学習規律や発言のルールについての指導を行っている ◎多様な答えが出る発問を準備している	◎発表の仕方などきめ細かな指導を行っている ◎個人思考と集団思考の場を設定し、中心発問、補助発問を明確にしている	◎思考力・表現力・判断力を高める発問を準備している ◎発表内容を高めていくために、つなぎ発言や関連発言などを出させる	◎学習した内容をもとにして、生徒が日常生活との関連や、さらに進んだ内容への発展について考えるような教材や発問を準備している
4	みんなが発表者の方を見て聞く姿勢をもちます。	◎生徒の様子を見て、聞く姿勢に注意している	◎生徒が発表者の方を向いて聞こうとするまで待つ姿勢がある	◎指導的評価をしている ◎生徒が注目したくなるような具体物を持ち込んで、聞きたくなる工夫をしている	◎中心発問に対する発表に、「付け加え」たり、「深め」たりする発言を促し、学習内容を深めようとしている	◎ねらいに迫るために、しっかり考えさせる場を提供し、生徒が学習に真剣に取り組む雰囲気をつくっている
5	教師は1回の授業で5回以上生徒をほめます。	◎学習規律について、全体的にほめる	◎学習規律について、一人一人の質的な高まりをほめる	◎学習規律について、なぜ質が高いのか等、生徒の行動を価値づけてほめる	◎1人のとった学習方法の良さや意義を価値づけてほめる	◎学習内容について、授業のねらいに向かう高まりを即座にとらえて、そのよさや意義を価値づけてほめる

え、『おおたけ』と語呂を合わせました」（岡寺先生）

「おおたけ授業スタイル」を徹底するため、指導案にはどこが当てはまるのかを必ず明記する。また、黒板には、「本時のねらい」「本時のポイント」「やってみよう」というプレートを張った。生徒に対して、今、授業がどの段階であるのかを明示するための工夫だ。

授業展開の中で特に重視するのは、少人数グループでの話し合いだ。

「自分と友だちの意見をぶつけ合いながら、一つの目標に向かって意見交換をする中で自分の考えを高めていく。そうした授業を通して人間関係を築いていくことで、学習意欲や学力が向上するのです」（大石校長）

月1回のワークショップ型研修で授業力向上を図る

こうして形作られた「おおたけ授業スタイル」をしっかり定着させるため、同校は校内研修にも力を入れる。09年度からは、指導案作成から校内研修後までの一連のプロセスを「校内研修システム」として明確にし、研究授業を2か月に1回行っている。

「校内研修システム」は次の手順となる。

①模擬授業　研究授業の前日までに、教師が生徒役となり、研究授業の模擬授業を行う。生徒役となった教師は、授業案改善のためのさまざまな提案を行う。

②授業案の改善　研究授業当日までに、授業

図2　おおたけ授業スタイルの内容

お　おおきな文字で、ねらいをかこう！
- 本時のねらいの提示

お　おさえどころは、グループ・ペアで！
- ねらいに迫る中心発問、中心活動の明確化

た　だいじなポイントすかさずほめる！
- 本時のねらいについての評価

け　けいぞくさせよう家庭学習！
- 学習意欲や次時につながるまとめや課題

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

者は出された意見を反映して指導案を見直す。

③**研究授業**　年間計画で時間は確保してあり、教師全員が参加。参観する教師は気づいた点をどんどん付箋紙に書き込む。

④**事後研修会**　学年別にグループをつくり、「Good」（良い点）と「More」（改善点）について、授業中に書いた付箋紙を用いながらKJ法（＊）によってまとめていく。最後は班ごとに話し合いの結果を発表する。議論のポイントをあらかじめ決め、時間を区切って集中して議論する（**写真1**）。

「例えば、『5つの共通実践』の『みんなが発表者の方を見て聞く姿勢をもちます』という項目に絞る場合は、聞きたくなるような授業構成や発問が出来ているか、そういった指導技術がどこにあるのか、という視点で授業を見て、事後研修を行います。また、あらかじめ観察対象として選んだ生徒がどのような状況で耳を傾けていたか、あるいは聞いていなかったかを観察します。見るポイントを絞ることによって研修が活性化し、授業改善につながるような議論が出来るようになりました」（岡寺先生）

班別の話し合いでは活発に意見が交わされ、時おり笑いも起きる。授業改善のための学びが多く得られる機会として、教師全員が楽しみながら、前向きに取り組んでいる。

また、議論を深めるため、年5回、外部講師を招いて客観的な視点からの検証も行っている。

写真1　事後研修会の様子。ポイントを絞って、時間を区切って行うので、活発な意見が交わされる

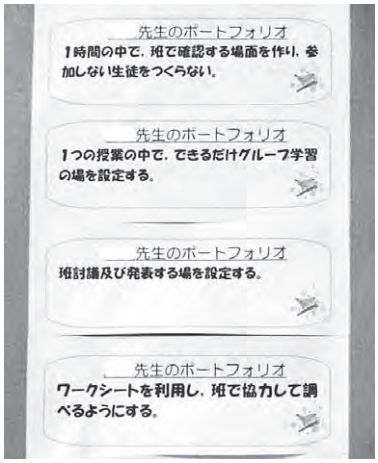


写真2　個人ポートフォリオ。教師一人ひとりが自身の授業改善の課題を明示する

教師一人ひとりの授業改善を記録したポートフォリオを作成

このようにして行う授業改善は、教師一人ひとりが「個人ポートフォリオ」として記録する（**写真2**）。教師は一人ひとり、「5つの共通実践」の中で重点目標を決めるが、その成果と次への課題、授業改善のあゆみをつづっている。

重点目標は目につきやすいよう、印刷室のコピー機前に掲示。これにより、職員室で授業改善についての会話が日常的に交わされるようになった。

ポートフォリオは週案とも連動している。週案には、各自の重点目標に関して5段階評価をし、評価や反省を書く欄が設けられている。管理職や教務主任がこれらの自己評価に目を通し、アドバイスできるようにしてある。

授業態度が落ち着き学力下位層にも学習意欲が

「5つの共通実践」「おおたけ授業スタイル」などの取り組みを続ける中で、生徒の授業態度は徐々に落ち着いていった。06年度には40件あった問題行動は毎年減少し、09年度は6件にまで減った。学力下位層にも、授業に積極的に取り組む意欲が芽生え、文部科学省の全国学力調査のスコアも改善してきた。

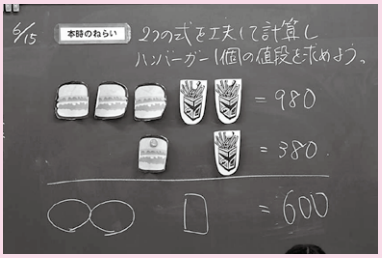
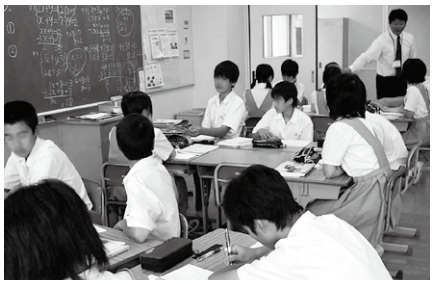
「先生が授業に対して本気で、生徒一人ひとりと向き合っていることが伝わり、信頼関係が生まれていることが大きいでしょう。しかし、本校の授業改善はまだまだこれから。生徒の学力が更に伸びるよう、全校一丸となって頑張っていきたいと思います」（大石校長）

＊ あるテーマについての課題やアイデアを紙に書き出して整理する、情報収集や課題整理のための手法

おおたけ授業スタイルの実践例 1　2年生数学「連立方程式」（岡寺裕史教諭）

本時の目標……係数の異なる連立方程式を工夫して解くことが出来る

観点別評価の規準…第三の式を作って、係数をそろえて加減法で連立方程式を解くことが出来る

	学習活動（主な発問と予想される生徒の反応）	◇指導上の留意点／◇努力を要すると判断される生徒への手立て
導入	**1 宿題の確認** ◎黒板に書いて確認する **2 導入** **ハンバーガー３個とポテト2つで980円。 ハンバーガー１個とポテト1つで380円である。 ハンバーガー１個の値段は何円だろうか。** ◎宿題のように違いを考えただけでは求まらないことに気づかせる **２つの式を工夫して計算し、ハンバーガーの値段を求めよう** ●引いたらハンバーガー２個とポテト１つで600円になる ●これを式にしたら使えないかな	おおたけ授業スタイル お **おおきな文字で、ねらいを書こう！** ●本時のねらいの提示  ◆課題を提示する ◆２つの式以外の式を作って利用したら良いことに気づかせる
展開	**3 ハンバーガー１個の値段を計算で求める** ●ハンバーガー１個の値段をx円、ポテト１つの値段をy円とすると、 上の関係は　$3x+2y=980$…❶ 下の関係は　$x+y=380$…❷ と表わされる ●違いを調べて❶－❷とすると $2x+y=600$…❸ と表される **4 ハンバーガー１個の値段の求め方を発表する** **どんな工夫をしたら求まったのか、わかりやすく説明しよう** ●❷×２をして$2x+2y=760$…❹として、❶－❹をしてxを求める ●❷×３をして$3x+3y=1140$…❺として、❺－❶をしてyを求めてからxを求める ●❸－❷をしてxを求める ●いつでも使えるのは❶－❹の方法だね	◆yの絶対値と符号が同じ２つの式が出来たら良いことを押さえる おおたけ授業スタイル お **おさえどころは、グループ・ペアで！** ●考えを交流し、深めさせる ◆はじめに個人で考えさせ、見通しを持たせて班で話し合わせる おおたけ授業スタイル た **だいじなポイントすかさずほめる！** ●視点を褒めて、更に既習の正確な用語ではっきり説明させる ◆発表に対して切り返し発問を行い、思考を深めさせる ◆「yの絶対値と符号が同じ２つの式が出来た」ことを確認し、どの変形もそれを見通していることを理解させる 
まとめ	**5 解き方についてまとめる** ●「yの係数が異なる場合は、一方の式を何倍かして係数をそろえて引けば良い」 **6 適用題、宿題の指示を出す** ●同様の問題 ●同様の問題２つの式を共に何倍かして、最小公倍数でそろえる問題	おおたけ授業スタイル け **けいぞくさせよう家庭学習！** ●「出来る」と思わせ、興味を継続させると共に、発展的に考えさせることで理解を深める

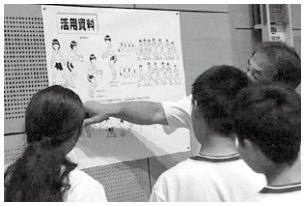
「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

おおたけ授業スタイルの実践例 2　1年生体育「球技（バレーボール）」（本田浩実教諭）

本時の目標／観点別評価の規準

① 安全を確認し、協力しながら活動できる【関心・意欲・態度】
② パス回数を増やすために、個人や班で作戦を考えることが出来る【思考】
③ オーバーハンドパスとアンダーハンドパスを適切に使い分けることができる【技能】
④ コートの使い方やネットの設置の仕方を理解している【知識理解】

	学習活動（主な発問と予想される生徒の反応）	◇指導上の留意点／◇努力を要すると判断される生徒への手立て
導入	**1 準備を行う** ●リーダーを先頭に、班ごとに6列縦隊に集合する ●元気よく気持ちのよい挨拶をする ●班内で出欠確認等を行い、リーダーが班の状況を報告する	◆決められた役割を果たすように声掛けをする ◆集合状態の良い班、声掛けが出来ている班を評価する ◆素早い行動を意識させる ◆出来ない場合は挨拶の意義について簡単に触れ、やり直しをさせる ◆リーダーの報告の仕方を評価する。あわせて聞く態度についても評価する
	2 本時の目標と内容を把握する ラリーを続けるための要素を見つけよう！	◆本時のねらいを提示し、学習内容についても簡潔に説明する おおたけ授業スタイル お　**おおきな文字で、ねらいを書こう！** ●本時のねらいの提示
	3 班ごとに準備運動と基本運動を行う	◆個人カードを参考にペアや班で協力して運動できているかを確認する ◆正確に元気よく運動できている班を評価する ◆基本運動については、ペア、班の運動の様子を観察し、これまで学習してきたポイント等を確認させる
展開	**4 練習1（円陣パス）を行う**  ●円陣パスを続けるための作戦を班で話し合う ラリーを続けるためには、何を工夫したら良いだろう？	◆４つの班で、時間内（５分間）に一番継続した回数を競わせる ◆声を掛け合ったり、回数を全員で数えたりしている班を紹介し、そのことになぜ意味があるのかを全体の場で示す おおたけ授業スタイル お　**おさえどころは、グループ・ペアで！** ●少人数班の活用でねらいに迫る ◆画用紙に記入させる ◆各班の話し合いを聞き、隊形や声掛け、役割分担等について工夫の余地があること、また、パスの使い分けや基本姿勢（構え）も重要であることを確認する
	5 練習2（班で考えた隊形等を生かした変形円陣パス）を行い、回数を競う ●目標を達成した班から練習３（簡易ゲーム）を行う。各班で工夫したこと、確認したことを発表する 	◆各班を回り、技術的なアドバイスを行う ◆目標回数を50回とし、クリアした班から練習３（簡易ゲーム）に取り組ませる（練習３にまで到達できない班もあり得る） ◆安全面で危険な行為があったとき、全体で確認した方が良いと思われる行為があった場合は緊急で生徒を集め、全体指導を行う おおたけ授業スタイル た　**だいじなポイントすかさずほめる！** ●今日の授業のポイントの明示 ●ねらいに迫る発表を褒める
まとめ	**6 整理運動** **7 各班で工夫したこと、確認したことを発表する** ●本時の評価、次時の予告を受ける ●後片付け	◆各班にしっかり運動をさせる ◆班で発表させる ◆発表の仕方や聞き方、内容について評価する ◆ねらいに迫る個人や班の動きについて評価する ◆次時の予告は簡潔に行う おおたけ授業スタイル け　**けいぞくさせよう家庭学習！** ●学習意欲や次時につながるまとめや課題

「授業記録」で見取りを共有 個に寄り添う授業を20年間追求

神奈川県 横須賀市立池上中学校

20年ほど前、荒れの渦中にあった横須賀市立池上中学校は、「個に寄り添う授業」を通して生徒の居場所を学校に確保し、立て直しを図った。学校が落ち着きを取り戻した今も、生徒一人ひとりの見取りを重視した授業研究を続けている。

課　題

- 荒れた時期が長く続き、学力向上の施策にまで目が行き届かなかった
- 不登校が多かった

実　践

1 「個に寄り添う授業」への取り組み

- 「グループ活動」を導入し、生徒同士が認め合い、学び合う機会をつくる
- 「授業記録」を活用して、生徒やクラスの様子を教師間で共有
- 「振り返りシート」を生徒に記入させ、授業ごとに生徒の感想などを把握
- 「教科三者面談」を実施。教科担当も個々の生徒との接触機会を持ち、適切なアドバイスを行う

2 月２回ペースの校内研究授業

- 「座席表」を活用し、個の見取りを重視した研究授業を実施
- 研究授業の時間を確保するため、前年度に日程を決定しておく、学校行事を精選するなどの工夫をしている

成　果

- 生徒の学習意欲が向上
- 不登校が減少

School Data

◎1947（昭和22）年開校。2002年度以降継続して、横須賀市フロンティア研究委託校。「共に学び合える学習集団育成のための学習指導」を中心とする授業研究に取り組む。

校長◎平野はるひ先生

生徒数◎427人　学級数◎ 14 学級（うち特別支援学級２）

所在地◎〒238-0035　神奈川県横須賀市池上 3-5-1

TEL◎ 046-851-1255

URL◎ http://schoolnet.edu.city.yokosuka.kanagawa.jp/schoolnet/juniorhigh/209ikegami/index.html

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

落ち着きを取り戻すため まず授業研究に着手

池上中学校は、過去に荒れた時期を長く経験してきた学校だ。そのピークだった20年ほど前、学校立て直しの軸として始まったのが授業研究だった。「生徒指導」の研究ではなく、なぜ「授業研究」に取り組んだのか。平野はるひ校長は、次のように話す。

「そもそも研究のスタートは、生徒指導という形で介入しても、根本的な解決に至らないということからでした。それならば、学校に生徒の居場所をつくろうと考えたのです。生徒一人ひとりが授業の中で力を発揮できる場面を用意し、生徒同士、生徒と教師が認め合う関係をつくる。その中で、自己肯定感を抱かせることが、学校を立ち直らせ、ひいては学力向上にもつながるはずだと考え、その考えの下、今日まで研究が継続されてきました」

以来、研究テーマは20年間一貫して、「個を理解し、個にせまり、個を生かす」。生徒全員が授業に参加すること、生徒一人ひとりを見取ることを重視してきた。教師がクラスや生徒について気づいた点を簡単にメモする「授業記録」、生徒自身が授業の感想などを記入する「振り返りシート」などを普段の授業で用いて、徹底して生徒一人ひとりを見取る取り組みを続けてきた。

グループ活動を取り入れ 生徒全員が参加できる授業に

「個を理解し、個にせまり、個を生かす」授業を実践するため、同校が軸としているのはグループ活動だ。指導案（P.18～19）にあるように、どの教科の授業でも、提示された問題について、2人組または4人前後のグループに分かれて話し合う場面を設ける。

「小グループでの活動を取り入れることで、すべての生徒が授業に参加することが出来ます。一斉授業ではなかなか発言できない学力下位層の生徒も、小グループでなら分からない部分を友だちに質問したり、発言したりする機会が得られ、学習意欲が高まります」（平野校長）

グループ活動は生徒同士の学び合いの場だ。生徒一人ひとりが発言でき、それに対して反応が返ってくることによって考えを深め、意欲を高めることにねらいがある。研究主任の香西由美子先生は、グループ活動は生徒の見取りもしやすいと話す。

「グループ活動というと、生徒の見取りが難しいというイメージがありますが、必ずしもそうではありません。むしろ、集団の中での生徒それぞれの役回りも見え、一斉授業での見取りよりも、生徒の個性が見えやすいというメリットがあります」

ただし、こうした活動が出来るようになるためには1年生からの積み上げが必要だ。教務主任の河合健治先生は、次のように話す。

「いきなりグループで話し合おうといっても1年生はなかなかできません。グループに分かれて机を合わせるところから始めます。最初は机が少し離れているだけでも厳しく指導します。また、1教科だけではなく、すべての授業でグループ学習を取り入れているので、生徒もすぐ慣れていきます。そうした中で、男女のこだわりなく、意見を言い合える関係が出来ていくのです」

同校におけるグループ活動は、新学習指導要領で言及されている「言語活動」を意識した取り組みでもある。

「新課程の全面実施を前に、これまでの取

横須賀市立池上中学校校長
平野はるひ Hirano Haruhi
「本校の良き伝統である『個に寄り添う授業』を大切にし、更に磨きをかけていきたい」

横須賀市立池上中学校
河合健治 Kawai Kenji
教務主任、1学年主任、国語科担当。「生徒の持てる力を発揮させたい」

横須賀市立池上中学校
香西由美子 Kouzai Yumiko
研究主任、3学年担当、数学科担当。「教育とは『強育』、強く育てること」

り組みを見直し、これまでやってきたことの意味を再確認することを、10年度の授業研究では特に力を入れています」（平野校長）

生徒の様子は「授業記録」で教師間で共有

授業での見取りの工夫に加え、生徒の見取りを教師間で共有し、更に多面的に見るための工夫もある。そのツールが「授業記録」だ。

同校には、各学年の教室と教室の間に、学年団の教師が利用する控え室がある。そこに置いてある「授業記録」に、授業終了後すぐに授業中の生徒の様子で気づいた点を個人名を挙げて記入するのだ。1日につき1ページ、全4クラス分の各授業について書き込めるようになっている（図）。用紙はファイルにまとめ、教師はいつでも見ることが出来る。

「他の授業で生徒はどのような様子なのか、生徒を見取るための指標として共有しています。前の時間にこんなトラブルがあったから今の授業でちょっと配慮しようなど、生徒指導的な観点でも見ています。教科の面では、例えば、国語ではあまり頑張れない生徒が社会では非常に頑張っているなど、生徒一人ひとりを多面的に見る材料にもなっています」（河合先生）

また、生徒自身にも授業の振り返りをさせている。授業の終わりに、生徒は個人個人の「振り返りシート」（「つぶやきカード」「学習カード」など教師ごとに名称は異なる）に、授業の感想、反省、学んだこと等を記入する。毎時、教師が回収し、生徒の様子を確認するための資料としている。

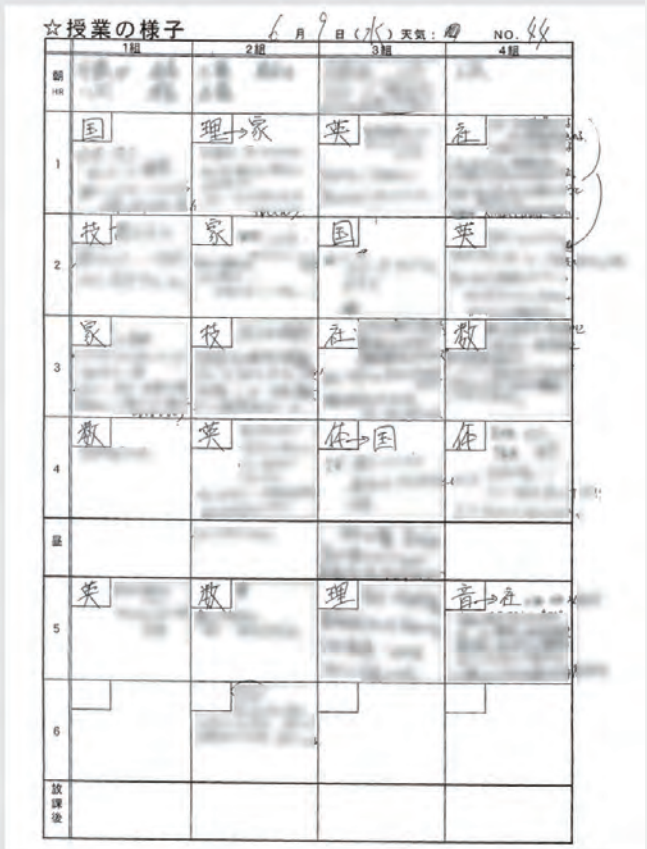
生徒を多面的に見るという観点で、学級担任による三者面談のほか、教科担任による三者面談も行う。生徒が希望する教科について、自分の学習の状況や勉強の仕方などを、教科担当の教師に質問・相談する。生徒が希望すれば全教科受けることも可能だ。また、生徒一人ひとりの成績等に関する資料は、生徒個別に3か年分のすべてをファイルし、校長室に保管している。

「初めて受け持つ生徒でも、得意なことや不得意なことなどを把握できるので、面談前にはこのファイルに必ず目を通しています。定期考査の一時的な成績ではなく、1年生からの成績推移を追いながら、どの教師も的確にアドバイスできます」（河合先生）

会議の短縮、行事の精選などで月2回の授業研究を必ず実施

生徒をしっかり見取り、グループ学習の効果を高めるために、研究当初から月2回の「校内授業研究会」を実施している。形式は2種類。一つは「校内研究授業」で、教師を3グループに分けてグループ内で授業を参観し合

図　「授業記録」



各学年の控え室に置いてあり、授業終了後、クラスの様子について細かく記入する。それにより、次時の担当教師はクラスの様子を把握した上で授業に臨むことができる

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

うというもの。もう一つは「全体研修会」で、道徳あるいはその他の1教科を全校一斉に参観し、討議するものだ。

いずれの場合も、参観時には、生徒個人の普段の様子と今回の授業に際して期待するポイントが書かれた「座席表」を配布。注目してほしい生徒を授業者があらかじめ指定し、その生徒の反応を中心に見取っていく。授業終了後は、グループ別に授業を振り返りながら研究討議を行う。

「『抽出児の様子』『グループ活動時の声掛けは適切だったか』など、討議のポイントは事前に提示されているので、話の中心がぶれません。グループ別の討議では、授業者や助言者もどこかのグループに入り、更に輪の中に加わって話し合います。一参観者として意見を述べてもらうことで、より話し合いは深まっています」（香西先生）

授業研究を定期的に行うために、時間確保の工夫もしている。授業研究の日程は前年度のうちに年間計画に組み入れ、計画的に準備する。職員会議は、事前に部会を行い、議題をある程度絞り込むことで、効率化を図っている。また、学校行事を精選。体育祭の代わりに陸上競技会とし、合唱大会も行わないなど、行事の準備時間を減らした。

授業研究が20年にわたって続けられてきた理由を、平野校長は次のように分析する。

「一人ひとりの子どもを学習に向かわせるための最良の手段を探りながらつくってきたのが、現在の体制です。その経緯や意味が代々の校長や教師にしっかり継承されてきた背景には、落ち着いて授業に臨み、学校生活を送る生徒の姿があると思います。こういった成果を実感できるから、継続できているのでしょう」

グループ学習は、２人組で行う場合と、４人以上のグループで行う場合がある。基本的に男女混合で行い、どの教科でも行うため、初めは恥ずかしがっていた生徒も、次第に臆せず話せるようになる

「学校が好き」という生徒の声を励みに更なる改善を

こうした取り組みを継続した結果、学校は落ち着いた状態を保っている。授業で臆せずに挙手・発言する姿が見られるなど、生徒は学習に対して非常に積極的だ。

「不登校は少なく、『学校が好き』という生徒が多いですね」（平野校長）

同校が目指したのは、学校や授業に生徒の居場所をつくることだった。20年の継続によって、ねらい通りの効果を上げていると言えるだろう。

一方、家庭学習が定着していない環境の生徒が多いため、始業前に希望者による学習会、放課後に学力的に配慮が必要な生徒を呼び出し実施する補習など、授業以外のシーンでも学力向上のための手立てを講じている。

「他校から赴任したばかりの先生は、授業のつくり方や研究授業の多さなど、本校の取り組みにとまどわれることも多いようです。しかし次第に、すべては個に寄り添うための意義あるものだと納得してくれるようです。今後は、踏襲すべきものと見直すべきものを検証し、『池上スタイル』に磨きをかけていきたいと思います」（平野校長）

個に寄り添うことを重視した池上中学校の授業例 1　3年生数学（香西由美子教諭）

本時のねらい
・根号を含んだ式の加法の結果が1つの数であることを理解する
・自分の考えの根拠を示して推論する力を伸ばす

＜授業記録のチェック＞　Bさんの表情が良くない状態だったので、指導上留意する

	学習活動	指導上の留意点
導入	**1 本日のベル学習** ●根号の中は、できるだけ小さい自然数にすることを確認 ●２人組になり、カードで音声計算を行う	**Point!** ペア学習を取り入れる
展開	**2 問題提示** ●面積２㎠の正方形と、面積５㎠の正方形を作図し、それぞれの一辺をつなげて線分を作ろう。線分の長さはどう表わされるだろうか？ ●方眼を入れたワークシートに作図する ●まず生徒１人で考える ●生徒の意見を求める （生徒の反応）・定規で測って約3.7㎝ ・3㎝から4㎝の間 ・$\sqrt{2}+\sqrt{5}=\sqrt{7}$ ・よく分からない	○コンパスを使って$\sqrt{2}$㎝と$\sqrt{5}$㎝を作図できることに気づかせる ○お互いに思いついたことを言い合う時間を設ける **Point!** まず生徒一人ひとりで考えさせる時間を設ける
展開	**3 課題を明確化** ●$\sqrt{2}+\sqrt{5}=\sqrt{7}$となるだろうか？ ●「なる」派と「ならない」派同士で４人前後のグループに分かれ、その考えの根拠について協力して考える （生徒の反応）・なる ・ならない ・分からない	○考えを伝え合う／演繹的に推論／図で説明／反例を挙げ、考えが正しいことを述べる **Point!** 一人で考えたことを踏まえて、グループで話し合わせる活動に移行する
展開	**4 課題の解決** ●各班で話し合い、班の意見をホワイトボードにまとめる ●各班の代表者が発表 	○これまでの学習や既習知識から考えて1つの意見に絞り、その根拠が他のグループにも分かるようにまとめる ○仲間の発表を聞き、$\sqrt{2}+\sqrt{5}=\sqrt{7}$とはならないことに気づく **Point!** 言語活動を意識した指導
まとめ	●$\sqrt{2}+\sqrt{5}$の計算についてまとめる ●「つぶやきカード」に本日の質問、感想を記入	**Point!** 「つぶやきカード」への記入

＜授業記録への記入＞　３班は、Bさんのつぶやきをきっかけに良い話し合いが出来た

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

個に寄り添うことを重視した池上中学校の授業例 2　1年生国語（河合健治教諭）

本時のねらい　・熱く語ろう！　1分間スピーチでの表現力を伸ばす

＜授業記録のチェック＞　前時の体育で全体的に説明を理解しきれていない。特にAさん

	学習活動	指導上の留意点
導入	**1 漢字テスト10問を行う（毎時実施）** ●教師が口頭で言う単語を漢字で書き取る **2 過去の自分のスピーチを振り返る**	○採点の際に間違えやすい箇所を指摘する ○自分のスピーチに対する友だちからのコメントを読み返し、長所と改善点を確かめる
展開	**3 ２つの課題について、隣同士で賛成役・反対役に分かれて熱く語る** ●テーマ「夏休みの宿題は必要か」 「優先席は必要か」	○自分の立場の考えを相手に伝えようとしているかどうか **Point!** ペア学習に取り組む。話すのが苦手な生徒を特に重点的にフォロー
	4 代表者が２人ずつ前に立ち、賛成意見・反対意見を主張する	○相手の立場を考えながら話を進める ○代表者の発表を評価しようとしている
	5 ４人組になり、１人ずつスピーチの練習をする ●テーマ「私の好きなもの、こと、人」 ●スピーチで大切なことについて各班代表が発表 （生徒の反応）・視線（みんなの方を見る） ・声の大きさ ・内容を整理して分かりやすく伝える ・熱く語る	○長所と改善点を指摘し合わせる **Point!** グループ活動。言語活動を意識する ○スピーチで大切なことを考えさせる
	6 １分間スピーチの発表と評価をする ●発表者自身が感想を募り、挙手した生徒を指名する	○過去２回のスピーチより良くなっている点に注目させる ○友だちに少しでも熱く語ろうとしている
まとめ	●「学習カード」に記入する	○成長した点を考えさせる **Point!** 「学習カード」への記入

＜授業記録への記入＞　Aさん、とても熱く語ると共に、相手に分かりやすく説明しようとしていた。スピーチも上達！

学校事例 3

外部講師の目や校内研修を生かし授業力と学習力の向上を目指す

大阪府 大阪市立花乃井中学校

大阪市立花乃井中学校では、大学教授による継続的な研修や教師同士の授業見学、生徒による授業評価など、外の力を必要に応じて取り入れながら教師の授業力の向上と、生徒の学習力の向上を目指している。

課　題

- 教師の授業力向上への意欲や、生徒の授業規律が定着していない
- 家庭学習をしていない生徒が多い
- 教師同士が授業を見合う等、研修の機会が乏しい

実　践

1 授業力と学習力の向上を目指した研修

- 大学教授を招き、外部の視点から授業改善についてアドバイスをもらい、研修を重ねる
- 数学、国語、社会、英語の４教科で実施

2 校内での授業研究の活性化

- 教師相互の授業公開と授業見学を行う
- 学年や教科にかかわらず、いつでも他の教師の授業を見学できる学校文化を醸成

3 生徒による授業評価の導入

- 授業規律に特化した評価項目を設定
- 目指す授業の最低基準を作り、全教師が評価項目をクリアする

成　果

- 授業改善に向けた教師の意識改革が進み、授業力が向上、授業規律も改善
- 生徒の学習力が徐々に向上

School Data

◎大阪の中心部に位置し、校区には中小企業や商店が多い。マンションの増加に伴い転入者が増えた。ボランティアによる「土曜スクール」や「夜間英語補習講座」、週2回の放課後全員補習「スキルタイム」など、学力向上に向けて独自施策を実践する。

校長◎宮田逸子先生

生徒数◎416人　学級数◎15学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒550-0002　大阪府大阪市西区江戸堀 2-8-29

TEL◎ 06-6441-0050

URL◎ http://www.ocec.ne.jp/jh/hananoi-jh/

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

授業の質の向上を目指す

花乃井中学校は、大阪の繁華街である梅田や難波からほど近い大都会の中心部に位置する。そうした同校の授業改革は、2005年度に赴任した宮田逸子校長が、生徒の学習状況を把握しようとアンケートを実施したことから始まった。

「アンケートの結果を見て驚いたのは、『家で全く勉強しない』と答えた生徒が多いことでした。また、遅刻の多さや服装の乱れが目立ち、授業中の私語や忘れ物が多いなど、生活規律の面でも問題を抱えていました」

教師の指導にも問題があった。例えば、授業中に寝ている生徒がいても、教師によって注意したり、しなかったりと、生徒への対応は十分ではなかった。これでは学力向上はおぼつかない。そこで、宮田校長は「授業の質と量の確保」を軸として授業改革に着手した。

「放課後の補習講座や土曜スクールを開講すると共に、何よりも教師一人ひとりの授業力の向上を通して『分かる授業』を実現することが第一だと考え、授業改革を進めました。『分かる授業』は、単に教科内容の指導が上手なだけでは出来ません。中学校教育、特に学力下位層の生徒においてはむしろ、『自分たちのことを見ていてくれる』『この授業についていけば大丈夫だ』という生徒の心を捉えて離さない授業の構築こそが重要です。生徒一人ひとりが学ぶ面白さを見つけだせる授業を目指しました。また、この『改革』には、教務主任をはじめ、主任層が大きく力を発揮しました」（宮田校長）

大学教授による指導で授業づくりを学ぶ

生徒一人ひとりが学ぶ面白さを見つけだせる授業の実現には、生徒をきめ細かく見取る教師の力量形成が鍵となる。同校は、授業の質を高めるに当たり、学校の近くにある大阪教育大の支援を受けることにした。大阪市教育委員会の「学力向上クリエイト研究」支援によるもので、まず数学を中心として、社会など、それぞれの教科を専門とする教授に指導に入ってもらった。教務主任（指導教諭）で数学科担当の石川邦子先生は、その成果について次のように話す。

「初めて教授から指導を受けた時には、これまでに経験がなかったので相当、緊張しました。指導をいただくようになってから3年目の今年も、その緊張感に変わりはありません。この気持ちが授業を組み立てる指導者を成長させていると思います。数学科では週1回の指導を受けていますが、指導計画に基づく毎時の授業のねらいや進め方について、的確な指導と手直しをいただくことによって、授業力は目に見えて向上しています。更に、教科研究の課題と進め方へのアドバイスを受けて、毎年、教科の研究発表を行っています。何より教授自身が授業中、行き詰まる子どもへきめ細かい指導をしてくださることが、授業者をはっとさせてくれます」

社会科担当の中西正明先生は、アドバイスは具体的ですぐ授業に反映できるものだったと話す。

「指導案を細かく見ていただいたのですが、例えば、指導案にあった『君は東京に住みたいか?』という発問に対して、『その問いは子どもにとって楽しいものでしょうか』と指

大阪市立花乃井中学校校長
宮田逸子 Miyata Itsuko
「『こういう学校にしたい』という先生方の思いをロードマップに描いて実現したい」

大阪市立花乃井中学校教頭
橋本 寛 Hashimoto Hiroshi
「粘り強く、ひたむきに努力すれば、夢は叶う」

大阪市立花乃井中学校
石川邦子 Ishikawa Kuniko
教務主任（指導教諭）、数学科担当。「『考える』ことから逃げない子どもを育てる」

大阪市立花乃井中学校
中西正明 Nakanishi Masaaki
社会科担当。「自分の身なりや立ち居振る舞いが生徒に影響を及ぼしていると常に自覚していたい」

摘されました。運動会明けで疲れている生徒と、文化祭に向けて頑張っている生徒では、状況がまるで違います。二、三の発問を用意しておき、生徒の状況を見て、その場に合った発問が出来るようにしておくべきだと助言されました。生徒の見取りが甘かったことを痛感しました」

このような細かなアドバイスが得られたことで、生徒を丁寧に見取る姿勢が次第に同校の教師に身に付いていった。

「特に新採用の教師にとっては、大きな刺激になりました」（宮田校長）

研究指定終了後も、数学を指導した大学教授はボランティアでほぼ毎週、指導に来ている。また、10年度には、国語と英語でも大学教授を招き、指導を受けている。

他教科の授業見学で授業への引き込み方を学ぶ

外部の力を生かした授業改善を図る一方、同校では年1回以上、教師がそれぞれ自分の授業を公開し、また他の教師の授業を見学する機会が設定されている。更に、校内研究授業などの公式の機会以外でも、いつでも授業を見学することが奨励されている。

「授業が分からない子どもを、どのようにして引っ張りながら授業を展開するのか。これはすべての教科に共通する課題です。授業への引きつけ方や雰囲気の作り方、どういった人間性で生徒に迫っていくかなど、教師は多角的な視点で他の教師の授業を見ています」（宮田校長）

生徒も授業見学に慣れていると、中西先生は話す。

「授業中に他の先生が入ってきても、生徒は全く気にせず授業を受けています」

では、どうすれば、生徒一人ひとりが学ぶ面白さを見つけだせる授業が出来るのか。宮田校長は、国立教育政策研究所の千々布敏弥総括研究官から指摘された「オープンクエスチョン」と「クローズドクエスチョン」がキーワードになると言う。

「クローズドクエスチョンでは、答えは一言、二言で終わってしまいます。そのため、質問される生徒の側が主役になりにくく、生徒が自分で考える余地が少なすぎてしまいます。一方、オープンクエスチョンは、相手の考えや気持ちを求める質問であるため、会話が発展しやすいという特徴があります。ですから、生徒の中に、面白さや理解の連鎖反応が次々に起こっていくのです」（宮田校長）

授業規律のみに絞った生徒による授業評価

同校では、4年ほど前から年1回、生徒による授業評価を実施している（**図**）。項目は、「先生は、チャイムが鳴り終わるまでに、教室に来ていますか」「先生は、私語でうるさ

図　生徒による授業評価項目

No.	評価項目	評価			
1	先生は、チャイムが鳴り終わるまでに、教室に来ていますか。	A	B	C	D
2	先生は、忘れ物の点検をしていますか。	A	B	C	D
3	先生は、前の授業の要点の確認をしていますか。	A	B	C	D
4	先生は、毎時間授業のねらいをはっきりさせていますか。	A	B	C	D
5	先生は、全員が分かるはっきりとした声で説明をしていますか。	A	B	C	D
6	先生の、黒板に書いてある内容は整理されていますか。	A	B	C	D
7	先生は、みんながノートを取っているか確認していますか。	A	B	C	D
8	先生は、私語でうるさいとき等に注意していますか。	A	B	C	D
9	先生は、チャイムが鳴り終わるまでに授業を終わっていますか。	A	B	C	D

年度末には生徒による授業評価が行われる。授業規律がきちんと保たれているかチェックする指標として活用する

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

いとき等に注意していますか」など授業規律に関するものだけで、「授業は面白いか」「授業は分かりやすいか」といった生徒の主観に左右される項目はあえて入れなかった。宮田校長はその理由を次のように説明する。

「生徒によっては『面白い授業』の意味をよく理解できていないこともあります。この項目は、あくまでも授業の枠組みです。低い評価を受けた教師がすぐに直せるチェックポイントだけにしました」

これらの項目は、教師全員が達成すべき最低基準というわけだ。生徒からの評価によって、授業規律のばらつきが解消できている。

主任クラスと合意した上で新たな方策を職員会議で示す

同校は、授業以外でも、地域のボランティアによる「土曜スクール」、週2回の放課後全員補習「スキルタイム」など数々の取り組みを取り入れてきた。宮田校長は、「精神的な支柱に置いているのは、『進取の気性』です。挑戦する精神を大事にしたいと考えています。毎年度、方策を常に2、3は出していくことを自分自身に課しています」と話す。

新しい取り組みを実施する際には、前もって管理職と主任の教師が話し合っておき、十分に検討してから、職員会議に諮るようにしている。

「新しい取り組みを職員会議でいきなり出すのではなく、事前に教務主任を中心に、主任の先生方と意思疎通を図っておくことで、新しいことに挑戦しようという機運が高まっていきます。職員会議で精神論は一切言わず、具体的な方策から話を始めるようにしています」（宮田校長）

橋本寛教頭も、主任クラスの教師との連携が重要だと話す。

「学校全体の方向性を確認し、皆が同じ方向に向くように、主任同士で普段から連携を取ることが大切だと考えます。その上で、それぞれの役職が果たすべき役割をしっかりと考えて、工夫して取り組んでもらっています」

教師が多忙なのは同校も例外ではない。宮田校長は、忙しさが子どものためになっているという達成感や充実感が大事だと話す。

「子どもと一緒に学んでいきたいという原点を、本校の先生方は絶対に捨てていないという信頼が私にはあります。疲れていても、大変でも、子どもたちのために頑張ろうという気持ちにさせることが、校長の責務の一つだと思っています」（宮田校長）

校内研修の1コマ。国立教育政策研究所の千々布敏弥総括研究官を招き、外部の視点から生徒の指導についてアドバイスをもらい、研修を重ねている

小学校見学からも授業改善を探る

ここ数年で、授業見学や授業評価に対する教師の意識は一変した。自分の授業を見られたり、生徒に評価されたりすることに対する抵抗感は無くなったという。

10年度は、初の試みとして、教師全員が校区の小学校の授業を見学した。

「9年間の義務教育には、一貫性が必要です。中学校の教師は『小学校でこうしてくれれば』と思いがちですが、小学校でどのような教育をしているのか、まずは相手を見ることが大事だと考えます。小学校の授業を見学して実感したのは、一人ひとりの子どもに対するきめ細かさです。中学校以上のものがありました。教科担任制である中学校では、その小学校のきめ細かな指導をそのまま取り入れることは出来ませんが、他教科の指導から学べることがあるように、小学校見学でも得られることがあると思います。教科の専門性がある中学校教師だからこそ出来ることを、もっと工夫しなければなりません。授業はまだまだ改善の余地があります」（宮田校長）

展開

練習問題⑤
$(x-y)\div 2=\frac{(x-y)}{2}=\frac{x-y}{2}$

Point!
理解度の低い生徒が陥りやすいミスに言及
「$(x-y)\div 2$は、『$x-y$ を２で割る』ということを表しています。もしカッコがなければ、y しか２で割れません。でも、分数の形にしたら、カッコがなくても $x-y$ を２で割るのだと伝わります。だから、カッコは必要ありません。必要ないものは書かないこと」

4 練習問題　その２
- プリント【問１】①～④に取り組ませる。

① $a\div 6$
② $4x\div(-7)$
③ $-5\div x$
④ $(a+b)\div(-3)$

◆しっかりノートをとっているか確認する
生徒が練習問題に取り組んでいる間、Ｔ２の教師と２人で机間指導。出来ていない生徒には個別に対応

- 【問１】①～④の答え合わせ

5 練習問題　その３
- プリント【問２】①～④に取り組ませる。

① $4\times a\div 3$
② $a\div 8\times(-b)$
③ $2\div x\div 3$
④ $4\times(x+y)\div 5$

◆しっかりノートをとっているか確認する
生徒が練習問題に取り組んでいる間、Ｔ２の教師と２人で机間指導。出来ていない生徒には個別に対応

- 【問２】①～③の答え合わせ

Point!
・全員が終わるまで待たず、できた生徒から順に黒板の前に出し、答えを記入させる。
・答え合わせに際しては、繰り返し「６つの約束」と「今日の約束」を振り返って意識させる

- 【問２】④の答え合わせ

$4\times(x+y)\div 5$

Point!
学力下位層の生徒へのフォローを意識
理解のあやふやな生徒は $\frac{4x+y}{5}$ としてしまいがちなので、あえてこの問題のみ、教師が解説をしながら解く。

「さっきの問題ではカッコをはずしましたが、この問題ではこのまま置いてください。分子に $x+y$ しかなければ、カッコは必要ありません。でも、これは、$4\times(x+y)$ です。ですから、この場合は絶対にカッコを付けてください。カッコがなければ、4と x しか掛け算が出来ません」

まとめ

5分　**6 復習と【問３】を宿題として出す**

◆チャイムが鳴り終わるまでに授業が終わる
チャイムが鳴り始めてしまったため、「チャイムが鳴ってしまったけれどごめんなさい」と断りながら宿題を出す

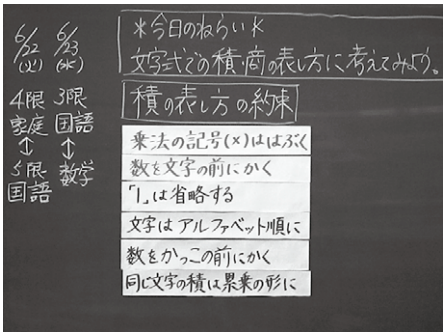
「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

花乃井中学校　数学の実践例　1年生数学　文字式での積・商の表し方　（佐々木香織教諭）

本時のねらい　・文字式での積・商の表し方を考えてみよう

・指導上意識した箇所を Point! で示した
・P.22「生徒による授業評価項目」に対応する部分を◆で示した

	時間	学習活動	教師の働き掛け
導入	15分		**◆始業のチャイムと同時に授業開始**
		1 宿題の確認 ●宿題プリントを確認	**◆忘れ物の点検** 宿題プリントを忘れた生徒をチェック。忘れた生徒に予備を渡す
		●積の表し方の「6つの約束」を確認する  	**◆前の授業の要点の確認** 前時で学習した、文字式の積の表し方の「6つの約束」を黒板に示す。生徒全員で声に出して読みながら確認 ・時々、眠そうにしている生徒を指名して「6つの約束」を読ませ、授業に集中させる ・答えに詰まっている生徒には「前の時間に確認した約束を思い出して」などの声掛けを行うなど、スパイラル的指導を意識
		2 導入 今日のねらい 文字式での積・商の表し方を考えてみよう	**◆授業のねらいをはっきり示す** 今日のねらいは、授業前に黒板に大きく書いておく
		●文字式の導入として、 整数を使った割り算の表記を確認 $2 \div 3 = \frac{2}{3}$ 確認 文字式では除法の記号（÷）を使わずに、 分数の形で表す $a \div b = \frac{a}{b}$	**Point!** **理解が追いついていない生徒を見逃さない** 答えに詰まっている生徒を見つけ、「割り算は掛け算にすることが出来ました。× という記号は省くと約束しましたが、÷ はどうだと思いますか？」とヒントを出す
展開	30分	**3 練習問題　その1** ●要点や練習問題が書かれたプリントを配布、ノートに貼らせ、確認事項を写す 練習問題① $a \div 5 = \frac{a}{5}$ $a \div 5 = a \times \frac{1}{5} = \frac{1}{5}a$　でもOK 練習問題② $x \div (-4) = \frac{x}{-4} = -\frac{x}{4}$	**Point!** **理解度の低い生徒が陥りやすいミスに言及** 「分母にマイナスがありますが、このような数はありません。2÷(−3)のときは、どうしていましたか？」と、整数の計算に戻って理解させる

学校事例 4

60分授業の導入により授業の「学び残し」を解消

秋田県 由利本荘市立大内中学校

由利本荘市立大内中学校では、目標とする内容を授業時間内に教えきれない「学び残し」を解消するため、3年前に60分授業を導入した。繰り返し学習や言語活動の充実を図り、基礎学力の定着、活用する力の向上を目指している。

課　題

- 授業時間内に目標とする学習内容を教えきれない「学び残し」が恒常化
- 宿題や補習でフォローすることが、生徒の学習意欲の低下を招いていた

実　践

1 60分授業の導入で「学び残し」解消

- 復習とまとめの時間を確保
- 授業時間内に発展的な課題にも取り組ませる
- 授業の再構成により単元内容を膨らませる

2 比較・練り合いで生徒の思考を高める3段階のステップ

- 机間指導を大切にした自力解決の保障
- 言語活動の機会を増やし活用力を高める
- 生徒同士の学び合いを取り入れる

3 教師の授業力向上と生徒の意識改革

- 「授業を見合う週間」で授業力向上と教師の意識改革を促す
- 「学習の心得　十箇条」で授業に対する生徒の心構えを説く
- 年4回、全生徒を対象に学習オリエンテーションを実施

成　果

- 「学び残し」が解消
- 基礎学力が向上
- 生徒指導上の課題を克服

School Data

◎1984（昭和59）年に大内町立大内中学校として開校。2008年、文部科学省の「全国学力・学習状況調査等を活用した学校改善の推進に係わる実践研究」調査活用協力校に指定される。

校長◎小坂 晃先生

生徒数◎111人　学級数◎4学級

所在地◎〒018-0855　秋田県由利本荘市松本字小及位野78

TEL◎ 0184-66-2010

URL◎ http://www.city.yurihonjo.akita.jp/edu/ouchi-jh/index.html

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

授業の「学び残し」が生徒の学力向上を阻む

大内中学校が、1コマの授業時間を50分から60分としたのは3年前のことだ。従来の授業時間では学力向上が難しいという課題があったためだが、小坂晃校長は生徒の様子を次のように話す。

「本校の生徒は明るく素直な性格の半面、自分らしさを表現するのが苦手です。課題にはまじめに取り組むものの、物事をとことん追求する、目標に向かって挑戦していく気迫には欠けています。また、数年前までは生徒指導上の課題もあり、学力向上が難しい状況が続いていました」

こうした状況の中で、授業ではある課題が生じていた。数学科の阿部亨先生は次のように話す。

「内容の振り返りが次の授業になったり、学んだことの定着が十分できなかったりといった『学び残し』が慢性化していたのです。授業で終わらなかった部分は宿題とし、進度の遅い生徒には補習を課すなどして対応していましたが、宿題や補習では、どうしても『やらされている』という感覚が強くなり、特に補習に指名された学力下位層の生徒はやる気を失いがちでした。授業時間内ですべての生徒に学習内容を定着させる方法はないかと考えた末、行きついた結論が60分授業でした」

60分授業に応じて授業モデルを再構成

年間のコマ数は減るものの、1単位時間内における「学び残し」をなくす。そして、繰り返し学習や学び合いを充実させることで、基礎学力の定着を図る。これが、60分授業への移行のねらいだ。これを達成するために、同校では次のような授業モデルを設定した（P.28図1）。

①前時の学習の想起と定着度の把握（5分）
②学習課題を示し生徒の学習への期待感を引き出す（導入、10分）
③比較・練り合いで生徒の思考を高める（ステップ1～3、30分）
④学習のまとめ（終末、10分）
⑤本時の内容を押さえる問題を解く（5分）

最大の特徴は、授業の最初と最後の各5～10分で、前回の復習と本時のまとめの時間を確保し、演習や実習などに多くの時間を割いていることだ。理科担当の東海林俊介先生は、回路と電流・電圧の授業を例にこう説明する。

「50分授業なら、豆電球を2個使って直列回路と並列回路の明るさの違いに気づかせる程度で終わってしまいます。授業時間が10分増えたことで、電球の数を3個に増やして実験するなど、課題をより深められるようになりました。また、従来は、別の時間で扱っていた回路図の書き方も、実験と併せて説明しました。単独で扱うより、生徒の理解を深められ、時間の節約にもなっています。内容を組み替えたり、膨らませたりしながら、より生徒の理解が深まるよう単元を再構成できるところも60分授業のメリットです」

言語活動の充実により活用力の向上を図る

授業時間が10分増えたことで、生徒が発表する時間や説明する場面を確保できるようにもなった。

「本校では、根拠を持って説明したり、共通性を見つけたりする作業を積み重ねることによって、より難しい問題にも対応できる力が身に付くと考えています。そこで、授業で

由利本荘市立大内中学校校長
小坂 晃 Kosaka Akira
「子どもが『学校に来るのが楽しい』と思えるような学校を目指したい」

由利本荘市立大内中学校
阿部 亨 Abe Toru
教務主任、数学担当。「授業を通して『出来る』喜びを生徒に実感してほしい」

由利本荘市立大内中学校
東海林俊介 Shoji Shunsuke
研究主任、2学年主任、理科担当。「熱い思いを持って物事に打ち込むことが出来る生徒を育てたい」

は生徒が話し合ったり、表現したりする場面をできるだけ多く設けています」（阿部先生）

例えば、課題に対する答えについて、数人の生徒に根拠を説明させる時、２人目以降の生徒が「A君と同じです」という場合も、「一字一句同じということはないでしょう」と問い返し、本人の言葉で説明し直させる。また、「A君に分かるように、Bさん、説明してあげて」などと、理解が十分でない生徒が理解できるよう、他の生徒に説明させることも重視する。A君が「まだ分からない」と言えば、繰り返し説明させることもいとわない。

「他人に説明できて、自分も初めてきちんと理解できるものです。また、友だちに説明してもらうことで、聞いている生徒の理解も深まります。これらは、生徒全員に学びの機会を保障する上で、大切なことだと考えています」と、東海林先生は強調する。

発表後に生徒は決まって「皆さんどうですか」と問いかけ、他の生徒は「分かりました／分かりません」と応答する。パターン化した問答であるが、クラスの一体感の醸成、生徒一人ひとりの当事者意識を喚起する上でも効果がある。

更に、理科では、本時の学習課題自体を生徒に考えさせることもある。授業の導入で課題を提示せずに、教師の発問や実験などを通して生徒自身が課題に気づくよう導いていくのだ。東海林先生は、「生徒自身が見つけた課題だからこそ関心は高まる」と話す。

60分授業にしたことによって、課題も出てきた。音楽や技術・家庭など単位数の少ない教科ではコマ数が減り、授業の間隔が開いてしまうことだ。日々の継続が欠かせない英語では、１コマの時間を増やすよりも、コマ数を増やしたいという考えもあった。

前者については、各授業の冒頭で前回の復習を丁寧に行うことを徹底した。後者については、毎朝始業前の20分に「Eタイム」という時間を設定し、英語の基本文の視写や単語・単文作りの練習を通して基礎基本の定着を促し、出来た生徒から朝読書に取り組んでいる。

「学習の心得　十箇条」で授業に対する心構えを説く

このような授業の実現には、授業に対する生徒の意識改革も不可欠だ。特に、60分間集中力が持続するかどうかは、取り組みの成否にかかわる。そこで、同校は授業のガイダン

図1　大内中学校が目指す６０分授業

段　階	学習活動と予想される生徒の反応	学習への支援と評価
Rチェック	・前時のSチェック問題を使い、前時の学習の想起と学習の定着度をつかむ。 （５分間のミニテスト）	
導入（10分）	・生徒の学習への期待感を引き出す教材との出会いを演出する。 「今日は何を学習するのか」「おもしろそうだな」「何を学習するのか早く知りたい」 学習課題：～してみよう、～だろうか。（めあて） ・一人一人に本時における学習の見通しを持たせる。 → 自己評価カードに記録	→ 生徒の思考を課題に反映させる。（生徒の疑問や発想、表現）
展開（30分）	【ステップ　1】 生徒一人一人の学びにそって自力で追求する段階 ↓ 【ステップ　2】 個々の学習（追求）した内容を、互いに出し合う段階。 ↓ 【ステップ　3】 比較・練り合いを通し、洗練され深まった考えを習得する段階 （他の生徒のよさを認めながら、優れた方法や考えを自分のものにする段階） ※　比較・練り合いでは教師の発問・切り返し・焦点化を図る活動を通し、生徒の思考を高めると共に、【ステップ　3】の段階で活用する力を鍛える。	
終末（10分）	・本時の個々の学習活動と学習内容をまとめる。 ◇　今日の学習は自分にとってどんな意味があったのか振り返る ◇　自分は何を学んだのか、できるようになったのは何か明らかにする。 ◇　次時はどんなことに挑戦したいのか。 ◇　家庭学習では何をしなければならないのか。	
Sチェック	・本時の内容を押さえる問題を解く（５分） →　小テスト等で基礎的な内容の定着を確認する。 家庭学習への意欲付け（何をすればよいのか） →　次時のRチェックで家庭学習での取り組みの成果を確かめる。	

同校のおおむね理想とする60分授業の流れを示した授業モデル。教科や単元によって細部はアレンジしている

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

スに力を入れ、「学習の心得　十箇条」で、生徒が授業に臨むときの心構えを示している（**図2**）。「授業開始の1分前には着席」などの学習規律に関するものから、「学んだことを自分の言葉でまとめよう」といった学習方法まで10か条が簡潔に示されている。細則として「結果だけでなく、根拠を大事にしよう」「言葉で表現することで本当の理解に結び付けよう」など、授業内容の定着、活用力向上のために、どのような態度で授業に臨めば良いのかが分かりやすく示されている。

「学習の心得　十箇条」は配りっぱなしにするのではなく、年4回、全校生徒を集めての学習オリエンテーションで読み合わせている。授業や学習における約束事や身に付けてほしい力など、時期に応じた内容を直接生徒に語りかける。

一方、教師の意識改革にも力を入れる。年2回（7、11月）、「授業を見合う週間」を設け、互いの授業を見せ合い、良かった点や改善点を明確にし、授業スキルの向上を図っている。教師は自分の公開する授業を指定して、指導案を配布。参観した教師は、あらかじめ設けられた「活用する力を伸ばす授業の創造」「学習の基盤となる望ましい学習集団の育成」などのテーマに沿って、成果（良かった点）と課題（改善点）を「授業参観カード」に記入し授業者に渡す。

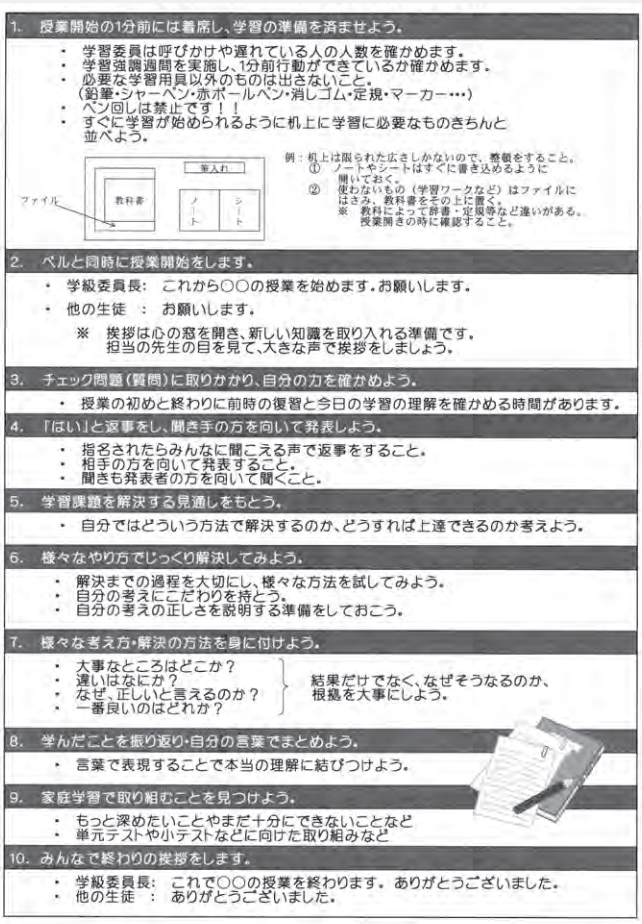
「他の教師の良い点を自分の授業に取り入れてもらうことがねらいです。多くの先生方が、発問のタイミングや発表のさせ方など、他の先生の良いところを授業改善に生かしています。教師同士が刺激し合うことで、学校全体でスキルを高めていこうという意識が浸透しつつあることを感じます」（東海林先生）

「学び残し」は解消するも活用する力になお課題

一連の施策により、課題であった「学び残し」はほぼ解消された。かつては学力が県平均以下の教科もあったが、今はすべて全国平均を上回るなど授業改善の成果も着実に表れている。生徒指導上の問題がほとんど無くなったのも、授業の質の向上と無関係ではないだろう。「学校生活の大半は授業。授業が面白くなければ学校に対する信頼も生まれません。授業の質の向上が子どもたちの生活を安定させる上でいかに大切なことであるかを改めて感じています」と、小坂校長は話す。

当初の課題だった生徒の活用力向上、課題の追究は「道半ば」（小坂校長）であるが、生徒同士の学び合いの活性化、授業後の振り返りの工夫などを通して改善を図る考えだ。

図2　学習の心得　十箇条



授業を受ける際の心構えとしてまとめたもの。年4回の学習オリエンテーションで確認する

60分を生かした大内中学校の授業例 1　2年生数学　連立方程式（阿部亨教諭）

本時の目標　・かっこを含んだものや分数、小数を含んだ連立方程式を解くことが出来る

過程	学習活動と予想される生徒の反応	学習の評価と支援
課題把握（10分）	**1 前時までの内容の確認（5分）** ◎プリントを使って加減法、代入法による連立方程式の定着を確認 **2 導入（5分）** ◎本時の課題「いろいろな連立方程式にチャレンジしよう」を提示	**Point!** **前時の学習の想起と定着度の把握** TAと教育専門監（＊）が生徒の反応を見ながら個別指導する ○かっこを含んだもの、小数、分数を含んだ連立方程式があることを認識させる **Point!** **学習課題を示し、生徒の学習への期待を高める**
展開（20分）	**3 かっこを含んだ連立方程式を解く（10分）** $\begin{cases} 4x+y=10 \cdots ❶ \\ 5x-2(3x-y)=-7 \cdots ❷ \end{cases}$ ● ❷の式を先に解き、いったん式を整理 $\begin{cases} 4x+y=10 \cdots ❶ \\ -x+2y=-7 \cdots ❸ \end{cases}$ ● ❶を２倍してそこから❸の式を引き x を出す $\begin{array}{rl} 8x+2y & =20 \\ -)\ -x+2y & =-7 \\ \hline 9x & =27 \\ x & =3 \cdots ❹ \end{array}$ ● ❹を❶に代入 A．$x=3$　$y=-2$ ● 確認プリントに取り組ませる	例題を提示し見通しを立てさせる（生徒から出ない場合は教師が説明する） ↓ ○最初にかっこを外すことに気づかせる **Point!** **比較・練り合いで生徒の思考を高める** 生徒を指名し、解き方を説明させる 「A君、みんなに分かるように説明してください」 ＊発表後には「皆さんどうですか？」と問いかけさせて、クラス全体で理解できているかどうかを確認する 途中の式をすべて生徒全員で復唱 ○かっこを含んだ方程式のかっこを外して整理することを理解させる
	4 小数を含んだ連立方程式を解く（5分） $\begin{cases} 0.6x+1.1y=7 \\ 2x-y=14 \end{cases}$ **5 分数を含んだ連立方程式を解く（5分）** $\begin{cases} 4x+3y=-1 \\ \frac{1}{2}x-\frac{1}{3}y=2 \end{cases}$	例題を提示し見通しを立てさせる（生徒から出ない場合は教師が説明する） ↓ ○最初に小数を整数にすることに気づかせる ○10倍、100倍して係数がすべて整数になるようにすることを理解させる 例題を提示し見通しを立てさせる（生徒から出ない場合は教師が説明する） ↓ ○最初に分母を払うことに気づかせる ○最小公倍数をかけて分母を払うことを理解させる **Point!** **比較・練り合いで生徒の思考を高める** 生徒を指名し、解き方を説明させる。３つの連立方程式と共に、工夫して前時までの形にすることに気づかせる
活用（25分）	**6 チェック問題を解く** ◎学習内容の定着のための問題…Ｄ問題 ● １問終わるごとに答え合わせ ● どの問題から始めても良い **7 発展問題に取り組む** ● 発展的な問題…Ｓ問題 ● Ｓ問題が難しい生徒は問題ノートに取り組む	**Point!** **学習のまとめ** TAと教育専門監が生徒の反応を見ながら個別指導に当たる 60分授業を生かした発展的な学習により理解を深める ↓ つまずきが多い場合は、教師間の情報交換により全体で説明 **Point!** **本時の内容を押さえる問題を解く**
まとめ（5分）	**8 本時の振り返り** ● 自己評価カードを記入する	○式を整理したり、整数にしたりすれば、これまで学んだ学習内容で対応できることを確認

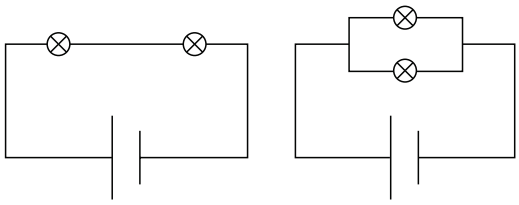
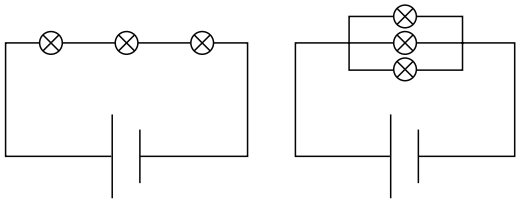
＊秋田県教育委員会が指導力の高い現職教員を任命するもので、本務校のほか、近隣の学校での授業支援や指導助言、授業公開などを行う。
全県で20人ほどの小中学校教員が任命されている

「学力保障」のために、移行期間の今できること
第2回

学力下位層が伸びる授業づくり

60分を生かした大内中学校の授業例 2　2年生理科　回路と電流・電圧（東海林俊介教諭）

本時の目標
・豆電球や導線を使って、進んで電流回路について調べようとする（自然事象への関心・意欲・態度）
・豆電球のつなぎ方と明るさとの関係について気づくことができる（科学的な思考）

過程	学習活動と予想される生徒の反応	学習の評価と支援
課題把握（10分）	**1 課題の把握** ●演示実験により課題をつかむ ＜単元の課題＞電球の謎を解き明かそう ＜本時の課題＞豆電球のつなぎ方と明るさの関係を見つけよう	○乾電池の数やつなぎ方を変えた回路を作り、既習の学習事項を確認する **Point! 前時の学習の想起と定着度の把握** 前時や小学校の内容を復習 ○電流の学習に対する動機づけを図るために、大きな直列回路と並列回路の装置を準備し、生徒の驚きや疑問が出やすいようにする **Point! 学習課題を示し、生徒の学習への期待を高める** 生徒の口から課題が出るよう誘導する （「つなぎ方が違う」という言葉だけでも引き出したい）
展開（40分）	**2 課題解決** ●２個の豆電球のつなぎ方と明るさを予想する ＜予想されるつなぎ方＞ 明るい　暗い  ●ペアで実験をする ●豆電球の直列つなぎと並列つなぎでの明るさを確認する ●３個の豆電球のつなぎ方と明るさを比較する 	○電気抵抗（豆電球）のつなぎ方に着目するように、電池の数だけは変えないことを確認する ○まずは個人で豆電球のつなぎ方を考えるようにし、その明るさを根拠をもって予想できるよう、明るさの度合いを「１（暗い）・２（同じ）・３（明るい）」の３段階の数字で表すようにする **Point! 比較・練り合いで生徒の思考を深める** 理解の遅い生徒に分かるよう何度も説明させる 例「どうして並列つなぎにすると暗くなるのかな？ A君にわかるようにBさん説明できるかな？」 評価：豆電球や導線を使って、進んで電流回路について調べようとしている（自然事象への関心・意欲・態度） ○図を書くことは出来ても、電流回路を作ることが出来ないグループには、机間指導を通して個別に指導を行い、課題解決を援助する ○豆電球の数を増やして本時の課題を深める ↑ 60分授業を生かして発展的な課題に取り組む。60分を間伸びさせず生徒の興味を持続させる工夫でもある 評価：豆電球のつなぎ方と明るさとの関係について気づいている（科学的思考）
まとめ（10分）	**3 課題の整理** ●全体で結果について話し合う ・豆電球を直列つなぎにした場合、明るさは暗くなる ・豆電球を並列つなぎにした場合、明るさは明るい ●次時の確認をする ・電流回路の電流の強さや電圧を調べる ●自己評価カードを記入する	**Point! 学習のまとめ** まとめの際は、生徒にもう一度課題を読ませることで、生徒自身にまとめ方に気づかせる ○まとめる時は電気用図記号を使う ○今日の学習から出てきた疑問から、解決の手がかりとして「電流」「電圧」を導き出し、次時へつなげる ↑ 生徒の口から課題が出るよう誘導する ○自己評価に相互評価を加え、お互いを認め合う雰囲気づくりを心がける

読者のページ

Reader's VIEW

2010年度Vol.1特集「学力下位層を伸ばす３か年のストーリー」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト（http://benesse.jp/berd/）でご覧いただけます。

◎自己肯定感が高い子どもは学ぶ意欲も高いと、私も考えます。天理市立北中学校の、3年間を通してその心を育み、小学校のつまずきを克服する取り組みを、興味を持って読みました。　［長崎県／Ｋ中学校／Ｏ・Ｓ］

◎自己肯定感が身に付いていないのは本校も同様です。３年間の指導の流れが学年ごとに明確にされている天理市立北中学校の取り組みが参考になりました。
［宮城県／Ｆ中学校／Ｃ・Ｓ］

◎学習方法が身に付いていない生徒が、最近増えている印象を受けます。学びのルールや、学校のシステム、勉強の仕方、家庭学習の仕方等、基本的なことの指導が今こそ必要で、舞鶴市立青葉中学校が共に高まり合う学級づくり、学校づくりに取り組んでいることに共感しました。　［滋賀県／Ｔ中学校／Ｙ・Ｈ］

◎舞鶴市立青葉中学校が目指す「生徒自らの力で学びに前向きな人間関係を築く」ことは、一人っ子の多いこれからの世の中での、良いモデルになります。キーワードは「協働」「自立」「自律」でしょうか。
［沖縄県／Ｃ中学校／Ｕ・Ｔ］

◎中学1年生のクラス編成をする際、尼崎市立園田中学校が行っているような入学前算数テストは、生徒の実態を探る手がかりにもなるし、良い取り組みだと思いました。　［富山県／Ｆ中学校／Ｏ・Ｍ］

◎宮城県黒川高校の記事からは、高校における学力向上の切実な問題が伝わってきました。先生方が真剣に取り組んできたことが実感できます。
［群馬県／Ｏ中学校／Ｔ・Ａ］

◎学力下位層を伸ばす一つの方策は、「学び合い」であると考えます。どの学校も、名称は違うにせよ、そうした手立てを取っているのが印象的でした。その中でも熊本市立白川中学校の「対話する力」をベースにした取り組みは興味深く読みました。
［三重県／Ｍ中学校／Ｍ・Ｋ］

◎本校がある町には学力向上検討会があり、小中高で取り組んでいます。新藤全日中会長のインタビューの中でも、「補充」から、「共に学びに向かう集団」へと発想を転換しなければいけないという部分に共感できました。本校でどう進めていこうとするか考えさせられました。
［北海道／Ｓ中学校／Ｓ・Ａ］

◎今回取り上げられた事例が、いずれも中規模以上であったのが残念でした。ぜひ、小規模校の取り組みについても知りたいです。　［広島県／Ｋ中学校／Ｏ・Ｋ］

◎放課後の学習サポート等は、現在の教員数では難しい学校も多いのではないでしょうか。本校も特別支援が必要な生徒が複数おり、条件は厳しいです。記事をまとめる際にはそういう視点もぜひ入れてほしいです。
［北海道／Ｈ中学校／Ｎ・Ｍ］

◎特集の実践がそれぞれ学校の実態に合わせてあり、個性的。飾られていない真の姿が見えました。今回は特に良いと思いました。　［長崎県／Ｋ中学校／Ｈ・Ｈ］

◎学力の全体的向上は、案外、学力上位層を更に伸ばすことによって生じるクラス全体のグループ・ダイナミクスもあると考えます。その辺りに焦点を当てても良かったと思います。　［島根県／Ｍ中学校／Ｔ・Ｙ］

編集後記

今号の取材では、事例校の授業の様子を拝見させていただきました。学校により授業づくりのコンセプトは異なりますが、大江先生が指摘された「専門的知識」と「集団経営力」の両立に、どの先生も心を砕いておられました。眠そうな生徒をすぐに見つけて声を掛けたり、生徒が「分かった」と思えるまで何度も説明を繰り返したり…。生徒との信頼関係が、日々の地道な実践の中で培われていることを改めて感じました。（渡邊）

VIEW21 中学版 2010 Vol.2　2010年9月1日発行／通巻第306号

発行人　新井健一
編集人　原　茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　柴崎朋実、長谷川　敦、中丸　満
山口慎治
撮影協力　荒川　潤、川上一生、ヤマグチイッキ

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
電話 03-5371-1238
〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー 22階

©Benesse Corporation 2010